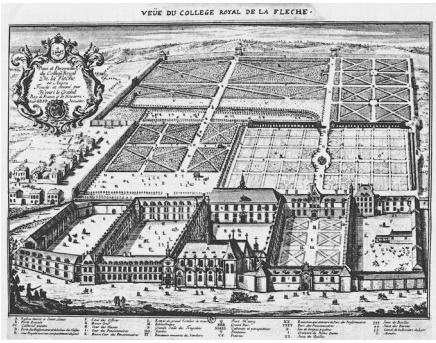
ラフレーシュ学院の挑戦
—17世紀フランスのコレージュ—

山　田　弘　明

＜要　約＞

イエズス会の学校（コレージュ）が、17～18世紀のヨーロッパの教育において大きな成果をあげたことは周知のことである。本稿では、フランスのラフレーシュ学院（1604年設立）を例に、どういう教育システムの下で何が教えられたか、その特徴は何であったか、日本の大学はそこから何を学びうるかを検討した。その結果、無償教育・平等教育の大原則のほかに、斬新で進歩的なカリキュラム設定、緻密で合理的な教授法の工夫、衛生思想の徹底など、当時としては革命的な学校経営がなされていたことが判明した。そこから日本の大学が学ぶべき点としては、古典による教養教育の充実、競争原理によるクラス運営、ディベートによる授業の活性化などがありうると思われる。

パリからクルマで南西に針路をとる。３時間ほど走れば、自動車レースで有名なルマンを通過し、やがてラフレーシュという小さな町に着く。水と緑の豊かな落ち着いたところであるが、町の北側を陸軍幼年学校なる大きな厳しい建物が占めている。かつてヨーロッパに名を残したラフレーシュ学院（Le collège de La Flèche＝挿絵参照）の跡である。このコレージュは、17世紀に少年時代のルネ・デカルトが８年あまりを過ごし、18世紀には若きデイヴィッド・ヒュームが２年滞在して『人性論』



名古屋大学大学院文学研究科（名古屋大学高等教育研究センター長）

を書いた由緒ある場所である。

本稿では、17世紀フランスのコレージュ（それは言うまでもなく高等教育への準備教育をなす）がどのようなものであったかを、ラフレーシュ学院を例に具体的に考察する[1]。この学校は要するにイエズス会の建てた学校の一つであり、その理念は中世的な伝統に立つ宗教教育である。そのため現在トピックスとして取り上げられることが少ないと思われる。しかしこのコレージュは決して前近代の遺物ではない。新しい理念と方法に基づく斬新な教育上の挑戦がなされ、17世紀当時は圧倒的な支持を得ていた。イエズス会がこの時期の「フランスの教育を支配したものであったといっても過言ではない」[2]。では、ここではどういう教育システムの下で何が教えられたか、その特徴は何であったか、現代の高等教育に役立つものがあるならそれは何であり、われわれ日本の大学はそこから何を学びうるか。こうしたことを考えたい。

1．17世紀フランスの教育とラフレーシュ学院

17世紀のフランスの教育状況を復習することから始めたい。革命期以前のフランスの教育にも、初等教育、中等教育、高等教育の区別をすることができる[3]。

初等教育とは、16世紀末に始まったプチト・エコール（小学校）および慈善学校のことである。これは農民や職人など貧しい民衆の子供たちのために、キリスト教の学習とともに、読み書き計算を教えたものである。学校数は多くなく、男女共学であるケースもあった。謝礼金が免除される場合もあった。要するに司教が教育を管理し、旧教の普及徹底を図る意図があった。

これに対して、中等教育はコレージュが担当した。これは貴族やブルジョアジーなど特権階級の人材養成機関であり、二つの種類があった。一つは大学付属のコレージュである。これは大学の人文学部と密接な関係にあった。たとえばパリ大学は、多数のコレージュを擁し、相互に人事の交流があった。しかし教育内容が古すぎたため、あまり人気はなかった。他の一つは修道会のコレージュである。さまざまな修道会のうち、とくにイエズス会のコレージュが大きな勢力を有していた。1615年の時点で全ヨーロッパに372校があり、生徒数は1626年で 6 万人を数えたという。就学率の低い時代を考えると、この数字は大きい。イエズス会の学校は、スペイン

やイタリアだけでなく、フランスの中等教育に重要な位置を占めた。そのうちで有名なものは、パリのクレルモン学院（設立1563年）、そしてラフレーシュ学院（同1604年）である。

高等教育はむろん大学が担当した。当時大学はパリ、オルレアン、アンジェー、ポアチエ、ボルドー、トゥールーズ、エクス、アヴィニヨン、モンペリエなど、多くあった。ふつうは神学部、医学部、法学部の三学部から構成されていた。だがパリ大学などには予備課程としての人文学部があり、いわゆる自由七科が学部への準備教育として教えられた。これはコレージュでの哲学級の教育に相当するものであり、いまでもフランスのリセの最終学年はこの伝統を守っている。この時代、大学においてもその教育は宗教的権威の監督下にあった。

上述したイエズス会は、スペインのイグナティウス・ロヨラによって1540年に創設された修道会である。ローマ法王に忠誠を誓い、旧教を守る鉄の団結を誇った。宗教改革のさなかにあって、新教に対抗できる反宗教改革の星であった。この会は団体精神が強く、青少年の教育や海外布教に熱心であった。はるばる日本に布教に来たフランシスコ・ザビエルはロヨラの腹心であった。一般にイエズス会は、目的のためには手段を選ばない、詭弁を弄するなどと言われるがことがあるが、しかし教育面での功績は大きい。第三代アクアヴィヴァ総長がまとめ、かつ実践した『イエズス会教学綱要』（*Ratio Studiorum*. 1586, 1599）は、世界の教育理念に大きな変革をもたらすものであった。

ところで、フランスにはガリカニスム（ローマ法王に対するフランス教会の相対的独立）の伝統があり、イエズス会の結成にはパリ大学や高等法院など反対する向き多かった。しかし1561年結社が認可され、パリのクレルモン学院に次いで、1604年ラフレーシュ学院が設置された。ラフレーシュの設置者はアンリ四世自身であった。この王は教育に力を入れ、1600年には大学改革をするなど、いわば教育立国をはかった人である。独自な教育理念をもったイエズス会を手厚く保護し、自分の出身地にある城館を与えて学校とした。王は自分が死んだときは、その心臓を学校のチャペルに葬るよう命令し、実際その通りにされた。今も王のレリーフが正面入り口の上を飾っている。

この学校の就学形態は、いまで言えば小学校高学年から高校までの８年～９年の一貫教育であった。その目的は、カトリシズムの教育を基礎とし

て新時代の人材を養成することであった。教育理念は青少年にキリスト教の教えを体得させることだったが、そのアウトプットとしては、プロテスタンティズムを跳ね返す鉄壁の精神を作ることだった。そしてラフレーシュには優れた人材が送りこまれ、よく練られた教育プログラムの下に斬新な教育実践がなされた。ためにその名はヨーロッパ諸国に知れわたった。フランシス・ベーコンはイギリスでそのうわさを耳にしている。デカルトはラフレーシュを「ヨーロッパで最も名高い学校の一つであり、この地上のどこかに学識ある人がいるのならば、ここにこそいるはずだ、と私は思っていた」[4]と証言しているが、それは決して過言ではないであろう。

イエズス会は1764年、ルイ15世の命によりフランスから追放されることになるが、それまでの200年間フランスの教育を支えてきたのである。

2．学校経営の特徴

経営上の特徴の一つとして、学費を無償としたことがあげられる。創設当初、イエズス会のどのコレージュも財政は不安定であり、篤志家からの援助でかろうじて経営を維持し、苦しい状況を克服して繁栄の基礎を築いていったという[5]。ラフレーシュも同じであったと思われる。広大な建物の管理、多くの生徒をかかえる学校の運営、教授への給与などの人件費、設備・備品費などで多額の費用を要したはずである。それをおそらく寄付金などで賄っていたのだろう。だが、経営が苦しいにもかかわらず、寄宿舎の費用は別として、学校教育はすべて無償とした。これはイエズス会の基本方針であり、今までになかった制度として世にアピールした。これによって貧しい地方貴族や中小ブルジョアジーの子弟の就学が大幅に可能になり[6]、原則的には、どんな子供でも能力さえあれば、ただでエリート教育の仲間入りができたのである。

第二の特徴は平等主義である。17世紀はじめの時点で、ラフレーシュには1200人～1400人（うち寄宿生は100人）のあらゆる身分の生徒たちが在学しており、貴族だけでなく商人や農民の子弟も含まれていた[7]。そしてかれらは身分の差なく平等に取り扱われた。最も身分の低い家柄の息子が、最も身分の高い者と同じ部屋で生活し、机をならべ、寝食を共にした。裸足で下着だけ、木の実とパンの入った手さげという貧しい出で立ちでやってきたある子供は、はじめ料理番や教室の掃除係をするなど苦労した結果、のちにパリ大学総長になったという例もある[8]。名門出身の寄宿生がラフ

レーシュにやって来ると、剣は名札をつけて武具庫に預けられた。剣を置けば家柄の者は出自を忘れ、貴族・ブルジョアジー・庶民の区別はもはやなくなる[9]。この徹底した平等主義については、卒業生デカルトの証言がある。

> ラフレーシュには、フランスのあらゆる地方から多数の青年が集りますから、お互いに話しあうことによって性格も練れ、ほとんど旅行をしたに等しい知識も得られるというものです。イエズス会の先生たちが、身分の上下の差なく生徒をまったく平等に取り扱うことによって、生徒たちのあいだに平等の気風を確立したのは、きわめて結構な創意です[10]。

デカルトは「フランスのあるゆる地方から」と書いているが、実はわずかだが外国人留学生もいた。その国籍はロシア、ダッタン、中国、アメリカ、インド、ドイツ、イタリア、イギリス[11]である。留学生の在学した正確な年代は示されていないが、17～18世紀、イエズス会の学校はヨーロッパ以外からも留学生を集め、国際的な雰囲気があったことを示している。

第三に、勉学に対する取り組み方が真摯であり、寄宿制度が厳格であったことである。ラフレーシュ学院では、熱意のある優秀な教授陣の下で、勉強は神聖な時間という認識が浸透していた。授業以外にも時間割がきちんと定められ、すべてがきびしくかつ配慮の行き届いた管理教育であった。寄宿生にはさらに厳格な生活規則が課せられた。朝5時起床、礼拝、朝食前の自習、授業、ミサ、昼食、授業、復習、読書、夜は祈りのあと9時就寝、という日課であった。要するに監督官の下で、起床から就寝まで細かく管理され、外出も当然制限されていた。しかし、ただきびしいだけでなく、のちにも触れるように能力評価型の教育、罰するよりも褒める教育であった。しかも比較的休日が多くあった。教授と生徒とが寝起きを共にし、一丸となって教育に情熱を燃やしていたことが伺われる。むろん例外もあり、鞭打ちやドロップアウトもあったろう。集団生活に不適応な子供もいたであろう。しかし『教学綱要』の目指す、「勤勉、服従、敬虔、純潔」という教育指標を、学校全体が身をもって実践していた観がある。宗教戦争などで世の中の秩序が乱れ、大学付属のコレージュが退廃していただけに、イエズス会のこの厳格な姿勢は大歓迎されたと思われる。

以上に加えて、ラフレーシュでは衛生思想が徹底していたことも注目さ

れるべきである。食堂入り口に手洗いがあり、共同寝室とは別に医務室があった。赤痢流行のため、伝染病患者を隔離する部屋まであった[12]。疫病の流行しやすい時代であったとはいえ、こうした施設の整備は破格のことであり、父兄は安心して子弟を学校に任せることができたであろう。

3．カリキュラム編成の斬新さ

教育実践の成功の秘訣の一つはカリキュラムの魅力にある。ラフレーシュではどんな授業が組まれていたのか。平均的な場合では、全部で8年の課程があり、学年ごとにカリキュラムは異なる。その内容は『教学綱要』できびしく定められており、ラフレーシュはそれを忠実に守った最初の学院である。年度によって異なるが、標準的なケースでは、次のように組み立てられていた。

基礎学級　5年（文法学級3年、人文学級1年、修辞学級1年）
哲学級　　3年（論理学、自然学・数学、形而上学・道徳）

入学してきた生徒はまず基礎学級の文法学級に入り、ギリシア語・ラテン語の文法を学んだ。ギリシア語よりもラテン語に力が入れられた。授業は、文法事項の暗誦、ファイドロスやアイソポスの寓話などの講読、作文が中心であった。3年間で文法の基礎とシンタックスを学んだのちに、人文学級に進む。これは西洋古典のアンソロジーを読むもので、教材内容はカエサル、タキトゥス、クセノフォン、プルタルコスなどの歴史、ウェルギリウス、ホラティウス、オウィディウス、セネカなどの悲劇、スタティウス、クラウディアヌスなどの詩であった。ギリシア語のテキストにはラテン語対訳が付いていた。修辞学級では、キケロ、デモステネスなど雄弁家の文章を手本として文章力や記憶力を涵養し、詩作や演説の練習をした。

哲学級では、もっぱらトマス＝アクィナスの解釈したアリストテレスの哲学を学んだ。これは中世以来、学問の伝統的なやり方であり、旧教を守らんとするイエズス会の基本方針でもあった。1年目でアリストテレスの論理学的著作を、トレトゥス、フォンセカという新しいスコラ解説書により習った。2年目では同じくアリストテレスの『自然学』をスコラ的解釈によって読んだ。数学は3年目に習うケースもあったが、算術、幾何学、音楽、天文学のほかに、測量術、三角法、計時法、地理学、水理学、年代

学、光学など応用面も含まれていた。最終学年では、アリストテレスの『デ・アニマ』『形而上学』『ニコマコス倫理学』などの主要部分が、注釈を付しながら教えられた。

こうしたカリキュラム編成の新しさはどこにあったか。その最大の点は、アリストテレス＝トマスの伝統的学問に加えて、ルネサンス以降になって発見されたギリシア・ラテンの古典の学習（いわゆる人文学）を取り入れた点である。ルネサンス人文学を基礎教育とする点に新しさがある。それまで人文学は、宗教改革の思想につながる恐れもあって、教育体系の埒外におかれていた。しかしパリ大学に学んだロヨラはその重要性を知っており、人文学と中世スコラ学とを融合させた新しい教育理念を構想した。それが上のカリキュラムに忠実に実現されているのである。ラフレーシュは当時、最も進んだ教育を行っていた[13]と言えるだろう。イギリス人フランシス・ベーコンは「遠い昔のすばらしい部分が、最近イエズス会員の学院によってある程度まで復活された」[14]、とたたえている。

上の教育課程が子供の精神の発達に沿ったカリキュラムになっていることも、新しい工夫と見てよいだろう。教室では原則としてラテン語が用いられ、フランス語は禁止であったほど徹底したラテン語教育がなされていたが、それはラテン語を習得させることが子供の精神を鍛えるという認識に立っている。その際、教材の質は学習者の能力と相関している。「記憶力の盛んな文法学級の時代には、ラテン語の学習を中心とし、次第に成長して想像力が活発となる文法学級の末期から人文学級、修辞学級の段階では詩学や修辞学をし、最後に悟性が目覚めてくる哲学級では思想的訓練を主対象とするのである」[15]。このように、教材が子供の精神能力の発達を考慮して系統的に構成されている点が注目される。

このカリキュラムの背景には、学問に対する進歩的な考え方があったと言える。たとえば、数学は悪魔の術とみなす向きが一部であったのに対して、ラフレーシュでは数学の重要性がつとに認識され、優れた教授の指導の下に数学が堂々と正課となっていた。イエズス会の学校創設以前には、数学は大学でしか教えられていなかった[16]。また1611年アンリ四世の追悼祭で、ガリレイの木星の衛星発見（1610年）をたたえる詩が朗読されたという記録があるが[17]、これは望遠鏡や天文学など、最新の科学的発見に対するイエズス会の強い関心を示すものである。たしかに会の方針としては、トマスの解釈によるスコラ哲学が基本であり、新しい学説を退ける風が根本にあった。しかし信仰や神学に直接かかわらない説はその限りではなか

った。要するに「保守的学説と進歩的学説との奇妙な混合」があり「緊張関係」があった[18]と考えられる。

しかし、こうした魅力的なカリキュラムにもかかわらず、実際の生徒には大変な課題であったと思われる。とくに最初のハードルである文法学級をクリアーできない子供たちは多かったであろう。デカルトは「ラフレーシュ学院ほど哲学がよく教えられているところはない」[19]としながらも、『方法序説』第一部で、古典語をはじめとして教科の一つ一つを批判的に吟味している。要するに、教えられる知識が不確実で、実際の役に立たないという批判である。教師の教える内容が間違っていても、その権威に追従せざるをえなかったことをデカルトは悔やんでおり、著作のいたるところで言及している。ラフレーシュとは関係しないが、その弟子エリザベトは、オランダでの女子教育を「つらく束縛された生活」[20]と、こぼしている。16世紀のモンテーニュは「学校はやはり学校だけのことしかない」とボルドーの学校教育に魅力を感じていない[21]。18世紀ドイツの哲人カントでさえ、少年時代に学んだフリードリヒ学院を「少年奴隷のような毎日であり、老年になっても不安と恐怖をもって想起する」[22]と述懐している。これらは初等中等教育の難しさ、限界を示す証言とも言える。

4．教育方法上の工夫

定められたカリキュラムをどう教えるか。ラフレーシュでは教育方法上の工夫がなされている。

教授法に関して言えば、哲学級の授業において新しいシステムが導入されていることが注目される。すなわち授業は、講義、復習、土曜討論、月例討論という４つの部分から構成されていた。「講義」（Lectio）は毎日、午前と午後の２時間ずつ行われた。内容はアリストテレス＝トマスの説明であり、板書あるいは書き取りによってなされた。各教授は教案ノートを持参していた。講義の最後に質問の時間を設けた。「復習」（Repetitiones）は通学生には毎日昼休みに、寄宿生には夕食後行われた。復習教師の資格をもつ学生が座長となって、２、３人の生徒にその日聴講した二つの講義内容を説明させ、疑問な点や難しい点を解明した。「土曜討論」（Sabbatinae disputationes）とは、土曜日の午後の講義において、生徒同士を討論させるものであって、テーマはその週に扱われた主題であった。反論者と答弁者の二人をあらかじめ決めて議論させ、週毎に答弁者と反論

者とは入れ替わった。反論は３つまで許された。議論のあと全員で自由に討論し、教授の役割は司会することのみに限られた。「月例討論」（Menstruae disputationes）は、月末の１日を費やして行われるもので、３人の教授とその生徒たちが参加した。テーマはあらかじめ定められ、答弁者は３人、反論者は上級生１人を含む２人であった。教授同士もしばしば議論したという[23]。

復習教師とは現在のTAに相当するが、「講義」で得られた知識は「復習」によってより確実に生徒たちに定着したであろう。理解の達成度は「討論」によって試されたであろう。知識は実際に使ってみてはじめて身につくものである。討論は、哲学教育の最大の実践の場であるだけでなく、一般に教育方法上の重要な戦略となることをラフレーシュの教授たちは心得ていたと思われる。

教室での授業運営に関して言えば、それが機能的かつ効果的になされていたことも工夫の一つである。教室は班長を中心に10人程度の班に分かれていた。授業に際しては、「学課の暗誦」、「宿題の採点」、「著作家の説明」の三つがはっきり分けられていた。はじめに、前の時間に習った教材の暗誦が、次いで宿題の採点が、各班毎に優劣を競うかたちで発表された。教授はその場をとりしきるだけである。「著作家の説明」は最も重要な部分であって、教授がテキストの読みや説明をした[24]。このやりかたは、集団を末端にいたるまで十分に管理するための方式であり、子供の競争心や名誉心に訴えて教育効果をあげようとする論功行賞型の教育方法である。たとえば、宿題を正確にやった生徒は褒賞として、読み方や作文の授業は免除される[25]という具合である。これは旧来の指導法とは異なる、ルネサンス人文主義の教育方法の原理であったという[26]。

その他、教育方法上の工夫としては、体育の奨励と演劇の活用とが挙げられる。体育の時間には、フェンシング、テニス、馬術、体操などがあり、雪合戦や遠足もあったという。そのこと自体は教育史では珍しいことではなかろう。しかしラフレーシュでは、子供の身体能力を高めるという本来の目的の他に、こうした機会を通して「生徒の性格を十分に観察し理解する」[27]という目論見をもっていたことが注目すべき点であろう。それほど子供たちをよく見ていたということである。他方、教育の手段として演説を導入したことも重要であろう。イエズス会では詩作、雄弁、討論の能力を重視していたが、演劇はそれを実演する格好の舞台であった。と同時に、演劇という装置によって生徒たちを道徳的・宗教的に感化する目的もあっ

た[28]。実際ラフレーシュ学院では、祝祭などがあるごとに演劇が上演され、詩の朗読会が行われた。学校での演劇の他に、公開の市民劇もあり好評だったようである。

なお、こうした課程を終えると、生徒たちの多くは大学に進んだ。神学部、法学部、医学部のいずれかを選ぶことになるが、ちなみにデカルトはポアチエ大学に進み、法律を学んだ。

5．日本の高等教育はそこから何を学びうるか。

以上、学院の創設、学校経営、カリキュラム、教育方法など、ラフレーシュ学院の挑戦の跡を見てきた[29]。それは今から数百年も前の西洋での話であるが、しかし教育には時代も国境もあまり意味がない。最後に、われわれはそこから何を学びうるか、現代日本の高等教育に役立つものがあるならそれは何かを考えておく。多くの論点がありえるだろうが、ここではいくつかの点を指摘するにとどめたい。

第一に、教養教育の見直しである。ラフレーシュでは、高等教育以前の段階で学生をすでに一人前の教養人に仕立てあげている点が注目される。コレージュでは教養教育を一とおり受け、大学では（パリ大学の人文学部は別としても）専門を深める、という図式がある。この伝統は現在のフランスの教育制度にも流れている。要するに、教養教育をすでに卒業した人が大学に入ってきたのである。日本でも、かつては旧制高校が教養教育を受け持ち、成果をあげていた。しかるに現在、日本の高校では受験教育が主であり、教養教育を十分に行う余裕はない。ならば大学の初年次で、教養教育をしっかりとやらなければならないだろう。これを抜きにしては、大学人とも教養人とも言えない。いま大学の教養教育は、教養部解体で焦点がぼやけたものになっている。制度の見直しを含めて、いい意味での教養主義の復活を望みたい。

第二に、古典教育である。ラフレーシュでの教育の基本は古典教育であった。古典の素読、暗記、作文が主たる内容であった。素読や暗記などは近代の教育理論に反するかも知れないが、とくに語学教育では最も合理的な方法であることが最近再評価されつつある。昔の子供たちは、意味が分っても分からなくても『論語』の素読を強いられたという。それによって子供たちは精神の規範を体得した。これは日本の古典教育の伝統である。むろん批判もある。孔子が現代人の教養の規範になるのかどうか、いまど

き漢文やラテン語が何の役に立つのか、と。だが古典を読むことは、ラフレーシュで認識されていたように、若い精神を鍛えることなのである。現在、日本だけでなく欧米でも、古典を読んで精神を涵養するという教育は必ずしも十分に行われていない。これでは精神の規範を構築する作業ができないことになる。そもそも現代人は規範となるものを失っているといわれる。規範や価値規準は多様であっていい。最初からある特定の価値に偏るのではなく、いろいろな考え方を知って頭を柔らかくする必要がある。それではじめて一人前の教養人たりうる。そのためにはグレートブックス・システムを見直すなどして、古典教育の重要性を再認識すべきである。

第三に、教育方法である。いまの日本の大学はかつてのようなエリート教育ではなく、大学進学者が50%を越える大衆教育の時代である。大学院も大衆化、多様化してきている。しかし教育方法の工夫によって、大学の理念を変質させることなく新時代に対応できるだろう。その一例としてラフレーシュのように、ある程度競争原理を教育に取り入れてもよいのではないか。一律の教育ではなく、優秀者を表彰し、そうでないものを激励するという論功行賞型の教育方法も一部導入すべきである。学生は本来見えっ張りであり、人からどう思われているかをとても気にする。名誉心に訴える教育方法を採用することによって、学生のやる気を引き出すことができるだろう。たとえば今のような多人数教育でも、みんなの前で教授からレポートを評価されることは、学生にとって大変な激励になるはずである。別の例としては、クラスを班に分けてそれぞれに責任をもたせるという授業運営のシステムも検討に値するだろう。学生がただ単に授業を聴き、ノートを取り、言われた本を読み、年に一度試験を受けるという受身の態勢では、知識は身につかない。自分も授業に参加している！という実体験空間を作る必要がある。そのためには、文系のゼミや理系の実験だけでなく、多人数の講義でも学生を班ごとに分けてチームを作り、自分の役割を認識させることが有益であろう。そして月一回TAや情報機器をも活用して、班ごとに共同発表を義務づけ、競争させる。こうした教育方法の改善によって、教育が活性化されるだろう。

第四に、カリキュラムの問題である。「精神の発達を意識したカリキュラム」は参考になるだろう。一般論として、大学１年生と４年生とでは意識がちがっており、学年に対応した履修科目を立てる必要がある。たとえば「科学概論」は理学部の４年生が聞いてもよいが、やはり１年生全員に聞かせたい。このように科目を年次指定し、カリキュラムを学年進行に合

わせて生成論的に構成するのが、教える側にとっても教えやすいだろう。討論（ディベート）の授業も用意すべきである。すでに高校のカリキュラムには入っており、大学でもゼミなどで事実上ディベートはしているが、まだ授業としては十分に浸透していない。これを教養教育の必須科目とする。もとより議論に勝つか負けるかは問題ではない。議論するテクニックを習得し、自分の意見を主張するだけでなく相手の意見を聞く訓練でもある。これによって学生は、自由で開かれた精神を養うことになるであろう。ラフレーシュで盛んだった演劇の利用も検討の余地がある。演劇という空間を設定することで、学生は自己主張のマナー、対話の仕方を学ぶであろう。演劇パフォーマンスとまでは行かなくとも、たとえば学生のプレゼンテーションをビデオで取り、みんなで批評するという授業もありえる。TV世代の若者は抵抗なしに、すぐ参加してくるだろう。

最後に、教育への情熱と、新しいものを積極的に取り入れる姿勢にも学ぶ点がある。まず日本の大学が教育への情熱を取り戻す必要がある。大学は世界に誇れる教育研究をやっており、大学教育は最高に面白い、ということを教師も学生も自覚すべきであろう。学生は教師のもつ熱気に触れてくれればいいのであって、熱気のない大学は大学ではない。また大学は知的遺産を伝達すると同時に、つねに時代の最先端を見て、いま世界で何が問題になっているか、何が大学に要求されているかに機敏でなければならないだろう。こうした姿勢が大学の魅力となるはずである。

イエズス会の学校は激動の世紀のなかを、みずからの教育理念によって200年もちこたえ、宗教的使命を果たした。日本の大学も、そのくらいの超長期的見通しのなかで教育研究の理念と使命とを考えるべきであろう。

注

[1] ラフレーシュのことを伝える原資料としては次の二書がある。Ratio Studiorum et Institutiones Scholasticae Societatis Jesu. *Monumenta Germaniae Paedagogia* Band.V. BerlinA.Hofmann & Comp. 1887（これを『教学綱要』と略称する）、P.Camille de Rochemonteix, *Un collège de jésuites aux XVIIe & XVIIIe siècles : Le collège Henri IV de La Flèche.* 4 tomes. Le Mans 1889（この書の巻数とページとをR.II.p.36などと略記する）。邦語文献としては、梅根悟監修・世界教育史研究会編『世界教育史体系９・フランス教育史Ⅰ』講談社1975（これを『教育史』と略記する）がある。ロシュモントゥの膨大なコピ

ーを筆者に提供して下さった横浜国立大学の宮崎隆氏に感謝する。

[2] 『教育史』p.72

[3] 以下の分析は主として『教育史』pp.44-72による。

[4] デカルト『方法序説』第一部（野田又夫訳、中央公論社）

[5] 『教育史』p.71

[6] 『教育史』p.79

[7] G. ロディス・レヴィス『デカルト伝』p.41（飯塚勝久訳、未来社1998）。ちなみにデカルトの友人でラフレーシュの先輩にあたるメルセンヌ神父は、農民の出身であった。

[8] R.II.pp.25-26参考、R. アリュー「デカルトとスコラ哲学―デカルト思想の知的背景」『現代デカルト論集II.英米編』（宮崎隆訳、勁草書房1996） p .288

[9] R.II.p.27（参考、同上書）

[10] 某氏あて書簡1638年9月12日。アダン・タヌリ版デカルト全集II.p.378

[11] R.II.p.28。デカルトの著作のなかに、ロシア、ダッタン、中国、アメリカ、インドが登場する。もしかれらが17世紀はじめの在学生であるなら、デカルトはラフレーシュ時代の留学生をイメージしていたとも考えられる。

[12] G. ロディス・レヴィス『デカルト伝』p.41

[13] 田中仁彦『デカルトの旅／デカルトの夢　方法序説を読む』（岩波書店1989）pp.18-19. R.III.p.7.

[14] 『学問の進歩』I-3-3（1605）

[15] 『教育史』p.74　ロシュモントゥも「文法学級から人文学級への段階的推移はイエズス会の発明である」と記している（R.III.p.5）。

[16] G. ロディス・レヴィス『デカルト伝』p.37。ロヨラはパリのコレージュ・ド・フランスで数学を学んでいる。

[17] R.I.pp.147-148。G.ロディス・レヴィス、同上書p.45

[18] R. アリュー「デカルトとスコラ哲学―デカルト思想の知的背景」『現代デカルト論集II・英米編』p.299-301

[19] 某氏あて書簡1638年9月12日。アダン・タヌリ版デカルト全集II.p.378

[20] デカルトあて書簡1645年 9 月13日。アダン・タヌリ版デカルト全集IV.p.288

[21] モンテーニュ『エセー』I-26（原二郎訳、岩波文庫（１）、pp.329-330）

[22] O. ヘッフェ『イマニュエル・カント』（薮木栄夫訳、法政大学出版会1991）p.13

[23] R.IV.pp.22-26

[24] R.III.pp.50-57

[25] A. バイエ『デカルト伝』（井沢義雄・井上庄七訳、講談社1979）p.9

[26] 『教育史』p.76

[27] 『教育史』p.77

[28]『教育史』p.78

[29] まとめとして『教育史』（p.79-80）は次の点を列挙している。人文主義思想を反映した斬新な教育課程とすぐれた教育方法の採用、社会秩序が乱れた時世に厳格な規律を尊重した教育、授業料を無償としたこと、教員養成に力を注ぎ優良な教師を供給したこと。われわれが付加すべきこととしては、教育に対する教師の熱心さ、衛生思想の徹底、進歩的学風、以外に何もない。

（付記）

脱稿後に、相馬伸一『教育思想とデカルト哲学』（ミネルヴァ書房、2001）を手にすることができた。この書の255頁－266頁にはラフレーシュ学院についての丁寧な記述がある。